

# 高次脳機能障害者の自己理解を進めるための支援技法の開発

○狩野 眞（障害者職業総合センター職業センター 上席障害者職業カウンセラー）  
古野 素子（障害者職業総合センター職業センター）

## 1 はじめに

障害者職業総合センター職業センター（以下「職業センター」という。）では、高次脳機能障害者の就職、雇用の安定、復職に資するため、個別の特性に応じた支援プログラム（以下「プログラム」という。）を実施し、自己理解の促進、補完手段の習得及び事業主支援を目的とした技法の開発、改良及び普及に取り組んでいる。

支援技法の開発にあたり、令和5（2023）年度に地域障害者職業センターを対象とした支援技法の開発ニーズ等に関するヒアリング調査を実施したところ、「自己理解や病識の乏しさのある対象者への効果的な支援方法を知りたい」「自己理解を深めるための支援技法を開発してほしい」など、高次脳機能障害者の自己理解に関する課題へのアプローチに難しさを感じるという意見が挙げられた。

そこで、令和6（2024）年度は、高次脳機能障害者の自己理解を進めるための支援技法について検討し、プログラム内での実践を取りまとめることとした。

## 2 開発にあたって

支援技法の開発にあたり、文献調査や高次脳機能障害者の支援に携わる専門家へのヒアリングを行い、前提となる考え方、留意点、支援方法等を整理した。

### (1) 前提として持っておくべき考え方・取組

自己理解を進めるための支援を行う際に、前提として必要となる考え方や取組について「高次脳機能障害者の障害理解と職業リハビリテーション支援に関する研究（2022）<sup>1)</sup>」では表1のようにまとめられており、専門家からも共通する意見が得られた。

表1 自己理解の支援を行う際に、前提として持っておくべき考え方・取り組み方

| 考え方・取り組み方の内容          |
|-----------------------|
| 信頼関係、協同関係の構築          |
| 支援対象者の目標達成に向けた支援      |
| 残存能力や「できるようになったこと」に焦点 |
| 多角的な視点でアプローチ          |
| 長期的な視点を持ち支援体制を考える     |
| 支援内容や活動の記録を見える化して共有   |

### (2) 留意点について

支援を行う際の留意点については表2のとおり、支援効果の限界や支援を行うことで生じる心理的リスクについても考えておく必要性等が示唆されている。

表2 留意点に関する文献調査・専門家からの意見

| 支援効果の限界について                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 【文献 <sup>1)</sup> における所見】 <ul style="list-style-type: none"><li>・ある程度の障害認識がなければ、支援効果が見られない。</li><li>・抽象的な推論能力や記憶に著しい障害がある場合は難しい可能性がある。</li><li>・訓練によりセルフモニタリングや自己調整能力の向上は一定の効果が見込めるが、練習した場面と類似性の低い課題への般化はエビデンスが十分でない。</li><li>・問題や課題を事前に予測し対処するという理解ができるようになるには、一定のメタ認知的知識（長期記憶に保存されている理解）が必要。</li></ul> |
| 【専門家からの意見】 <ul style="list-style-type: none"><li>・理解力が高い方だと教材を用いた心理教育が有効な場合があるが、困っている実感が無い方は、支援対象者自身が困るのを待つことが必要な場合がある。</li></ul>                                                                                                                                                                        |
| 心理的リスクについて                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| 【文献 <sup>1)</sup> における所見】 <ul style="list-style-type: none"><li>・障害の否認が要因として考えられる場合、「自己理解」の深化に焦点をあてる教育的支援が、敵意や怒り、防衛反応を引き起こす可能性がある。</li><li>・「自己理解」が深まることで抑うつ、不安をもたらす可能性がある。</li></ul>                                                                                                                    |
| 【専門家からの意見】 <ul style="list-style-type: none"><li>・自己への気づきに焦点をあてると、抑制が効かなくなり周囲を巻き込んでしまう可能性や抑うつをもたらす可能性がある場合、気づきの支援を無理に行わず、別の視点に目を向けて支援を行うこともある。</li><li>・自己の特性が分かっても、心理的側面から対処を行わないこともある。</li></ul>                                                                                                       |

### (3) 支援方法について

支援方法については、表3のとおり、前提となる考え方や留意点を踏まえ、自己理解の深化に焦点をあてた支援だけでなく深化以外に焦点をあてた支援の視点を持つことの必要性が示唆されている。

表3 文献調査・専門家からの意見で挙げた支援方法の例

| 自己理解の深化に焦点をあてた支援の例                                                                                                                                                                                                           |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 【文献 <sup>1)</sup> における所見】 <ul style="list-style-type: none"><li>・日常的（職業的）な場面に即した課題や状況の中で直接的にフィードバックする。</li><li>・障害や補完手段に関する心理教育を行い、実際の場面で起きていることと障害とを結びつける。</li><li>・対象者が課題実行中にセルフモニタリング・自己調整できるよう課題設定やフィードバックを行う。</li></ul> |
| 【専門家からの意見】 <ul style="list-style-type: none"><li>・準備の段階では気づきが生まれにくいのが、復職や就労後に、様々なことに気付いていく人が多い。</li><li>・受障前と現在との変化を感じる経験が気づきになり、セルフ・アウェアネスを進める動機づけとなることはある。</li></ul>                                                       |

| 自己理解の深化以外に焦点をあてた支援の例                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>【文献<sup>1)</sup>における所見】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・習慣化形成に重点を置く</li> <li>・心理的側面を考慮する</li> <li>・支援等への動機を高めるアプローチ</li> <li>・環境・周囲のネットワークへのアプローチ</li> </ul>                                                                                                                                                                  |
| <b>【専門家からの意見】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・客観的データを動機づけに役立てて目標設定を行う。</li> <li>・気持ちの波がある場合等、トラブル時に支援が途切れないように、支援者を限定せず地域で多角的な支援を検討する。</li> <li>・周囲からの期待や、自分がどうありたいかについて、対象者自らが言葉で出力し、出力できたことにに対し肯定する。</li> <li>・環境調整は重要な要素。自己理解に課題があっても職場で定着している事例もある。</li> <li>・職場の環境を確認し、受け入れ側の環境（受け入れる土壌）を作っていくことが大切。そのための支援を考える。</li> </ul> |

### 3 実践の進捗状況

文献調査や専門家の意見から、今回の技法開発では「自己理解を深める」ことが必ずしも対象者の課題の達成にとって必要条件ではなく、自己理解の程度を柔軟にとらえ、限られた期間において、就職や復職等の対象者の目標達成に向けて、自己の特性、求められる職務や働き方等についての知識を得ること、対象者自らが職務遂行に必要な補完手段を活用することや力を発揮しやすい作業環境を知るための体験をすること等といった「自己理解を進める」ための支援方法を検討することとした。

#### (1) グループワーク

グループワークは、演習や高次脳機能障害者同士の意見交換により、自己の特性に対する気づき、補完手段の習得に向けた動機を高めることにつながりやすい機会である。プログラムでは、これまで記憶障害、注意障害、感情のコントロールなど、障害特性をテーマとしていたが、対象者が働くことについて考えることを通じ、職務や働き方の知識を得ることを目的に、新たに「働き方」をテーマとしたグループワークを試行した。

グループワークの内容は、職業センターが精神障害者職場再適応支援プログラムにおいて行っているキャリア講習<sup>2)</sup>を基に、高次脳機能障害者の特性や就労経験等の個性性を考慮のうえ改編し、専門家からの助言を得て試行した（表4）。

表4 「自分らしく働く」を見つける講座の構成

|     |               |
|-----|---------------|
| 第1回 | 転機・自分を理解する3要素 |
| 第2回 | 興味・強み         |
| 第3回 | 価値観・まとめ       |

#### (2) 作業

作業課題は、ワークサンプル幕張版（以下「MWS」という。）を活用している。MWSは、OA作業、事務作業、実務作業の計16課題で構成されており、課題は、対象者の

症状や遂行能力、興味、復職者の場合は復職後に想定される業務等に基づき、対象者と相談しながら選定している。課題実施後に振り返りを行い、エラーの内容、発生頻度、要した時間および対象者自らが試した工夫を確認し、自己の特性や補完手段の有用性を考える機会としている。しかし、振り返り相談の中で、エラーや要した時間等対象者にとってネガティブな情報を前向きにとらえられない、これまで経験した業務内容とMWS課題の内容とを比べると現実性に欠けると感じる、問題が生じる可能性を予測し事前に対処する必要性の理解が難しい等から、自己の特性や補完手段の有用性を考える機会に繋がらないことがある。

そこで、自己の特性や補完手段の有効性について考えることのみに焦点を当てるのではなく、達成したい目標を細分化し、補完手段の活用を試みる動機を高める方法として、「作業を進める工夫の検討シート（仮）」を作成し、試行している。

#### (3) 個別相談

個別相談は、グループワークや作業を通して、対象者が得た気づきや認識、今後取り組みたい目標を確認している。気づきや補完手段の活用が目標となる場合は、特性チェックシート等のツールを活用しながら、目標達成に向けた支援を実施するが、気づきや認識が少ない、具体的な目標が定まらないという事例がある。

そのような事例に対して、自己の気づきや補完手段の活用等を目標にするのではなく、働くための準備、求められている職務や働き方から目標を考える方法について検討し、試行している。

### 4 今後の方向性

現在、試行中の取組については、今後もプログラムにおいて実践を重ね、対象者の目標達成に向け、それぞれの自己理解の状況に応じたプログラムや支援方法の検討を進めていきたい。また、今回の取組については、工夫した点や留意事項を取りまとめ、実践報告書として令和7（2025）年3月に発行する予定である。

#### 【参考文献】

- 1) 障害者職業総合センター『高次脳機能障害者の障害理解と職業リハビリテーション支援に関する研究—自己理解の適切な捉え方と支援のあり方—』「調査研究報告書No. 162」, (2022)
- 2) 障害者職業総合センター職業センター『ジョブデザイン・サポートプログラム気分障害等の精神疾患で休職中の方のための仕事の取り組み方と働き方のセルフマネジメント支援』「支援マニュアルNo. 23」, (2023)

#### 【連絡先】

障害者職業総合センター職業センター開発課  
e-mail : cjgrp@jeed.go.jp Tel:043-297-9044